特務部隊はシャーマン！？

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特務部隊はシャーマン！？

【Ｎコード】
Ｎ４４７１Ｚ

【作者名】
秋月秋代

【あらすじ】
転生者はシャーマンの続きモノ。

光ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

～第零廻～　プロローグ

▼三人称▼

時空管理局地上本部、レジアス・ゲイズ少将は嘆いていた。
ミッドチルダで起きる犯罪の数々。
優秀な局員は本局勤め、本局の連中は次元世界の取締ばかりで、地上のことを蔑ろにする……。
予算も本局とは天と地の差。
そして何より戦友達（ともたち）を六年前に失い、己の正義を見失い広域次元犯罪者に指定されてるジェイル・スカリエッティに、違法研究をさせている自分に……。

「ワシの正義……あいつと交わした正義。　此処何年耐え続けて来た……自身の正義から目を逸らして来たが……もう無理だ。　そうとも、ワシはこんな事の為に上を目指した訳ではない！！」

長年の良心の責め、机に立てられてる自身と戦友の目に耐え切れず、レジアスは一人職務室で叫んだ。
そしてレジアスは、写真立てを見て一人呟く。

「ゼスト、メガーヌ、クイント……今更かもしれん……だが、今更だからこそワシは、あの頃の自分に戻ろうと思う」

人は、必ずしも正しい道を歩むとは限らない。
甘い言葉に負け、挫折を味わい道を外れる事がある。
しかし、人は道を外れても戻る事が出来る。
レジアス・ゲイズは、六年という月日を経て以前歩いていた道へ

と引き返して行った。
そして遠い未来、レジアスは言う。
「あの時、引き返してて良かった」と……。

▲三人称▲

▼葉生視点▼

今、オレの目の前に頭を下げてる小肥りの男が居る。
彼の名前はレジアス・ゲイズ。
なのは達が、働いてる時空管理局のお偉いさんらしい。
なんでもミッドチルダを救う為に、シャーマンの力が欲しいとかなんとか……。

「頭を上げろ」

「……」

オレが頭を上げるよう言い、レジアスは頭を上げる。

「ふむ、何故シャーマンを知っているとか、シャーマンの力をどう利用するのかとか、どうでも良くなった。　良いぜ、あんたの力になってやる。　精一杯オレをこき使え」

「ありがとう……ありがとうっ！！」

何故オレが此処まで見知らぬ奴の為に言うかというと、単純にレ

ジアスの目が気に入った。
堕ちた濁った部分はあれど、それに負けない程の輝きを見たからだ。

以前聞いたリンディの声、闇の書の中で見せられた人の業、そして転生前にハオから聞いた「愚かな人間」という言葉。
ああ、ああ、確かに人間は愚かだ。
道を踏み外し、外道と堕ちる奴らばかりだ。

転生前のオレも、そんな奴らの一人だったからよくわかる。
でもよ……人は引き返せる。
やり直せるんだ。
見てるか？　ハオ。　人はこんなにも愚かだが、こんなにも愛おしい。

「だが、どうする？　レジアス。　管理局が欲しいのは魔導師なんだろ？」

「っ！　それについては考えがある」

涙を拭き、オレの質問に答えるレジアス。

そしてレジアスの考えとは、以下の通りらしい。
シャーマンと言っても、オレにリンカーコアがあるとの事、ソレを利用してリンカーコアを持つシャーマンの部隊を創るらしい。

「つまりは覆面魔導師の部隊と？」

「ああ」

「となると数が居るな、わかった。　オレ以外のシャーマンに会わせよう。　だが……」

「わかってる。　ワシが全員口説く！」

「よろしい。　スピリット・オブ・ファイア！！」

――ズガァァアアンッ！！

「ぬぅお！」

オレの後ろにスピリット・オブ・ファイアが現れると、レジアスは驚いたように声を上げる。

「って、待て」

「ど、どうした？」

何故、魔導師じゃないレジアスが見える？　魔導師としての資質がないだけで、リンカーコアはあるのか？

「レジアス……確認の為に聞くが、オレの横に何が居る？」

「ん？　赤い鎧を着た赤髪の女騎士だが」

『ッ！！　葉生』

どうやらレジアスには、シャーマンとしての資質が高いようだ。スピリット・オブ・ファイアの霊力に触れて、才能が開花したかな？　さっきの驚きはベビーから究極形態になった驚きだろう。

「OK、わかった。　それじゃあ、行くとしよう」

「ああ…」

▲葉生視点▲

～第一廻～　スカウト

▼葉生視点▼

レジアスを連れて向かった先は、ニューヨークのとある看護学校。
此処には、三人のシャーマンが居る。

『彼女達に会うのも久しぶりですね』

そうオレに言ったのは、赤く染まったアルトリアだった。
何故赤く染まったのか、これには深くも浅い事情があったわけで、とりあえず何処が赤いのかと言うと……金髪から赤髪へ、青いドレスは朱に染まり、手、足、胸にあった銀の鎧は深紅へと変わった。
変わらないのは、性格と翡翠の瞳だけだ。

アルトリアが戻って来たのは、もう皆と別れたあと……唯一会ったのがマリオンだっけ？

『ええ……』

「葉生……」

「ん、なんだい？　レジアス」

「どうしても入らねばいかんのか？　出来るなら連れ出して喫茶店か何処かで……」

レジアスが周りを気にしながら、小さく主張する。

まぁ女子寮の前で、オレは完全に女子寮に入ってる……そんな状態だからわからんでもない。
女子しか居ない施設。
むさ苦しいおっさんに、ネイティブ・アメリカンの民族衣装を決め込んだ男が二人。
周りの女子からは不審に思われ、レジアスからしたら恥ずかしい、気まずいといった感じだろう。　だが！！

「考えてもみろ？　こっちは頼みに来てるんだ。　あっちから来てもらうのは筋違いだ。　それにこういう所では、堂々としてれば良いのさ」

「そ、そうなのか？」

『いや、私に聞かれても……』

オレの言葉を聞いても信じきれないのか、レジアスはアルトリアに確認するように問い掛けるが、アルトリアは困った表情をしながら答えた。

「ぐぬぬぬ……」

「レジアス……キミの正義は女子寮に堂々と入れない程、ちっせぇものなのか？　だとしたら見込み違いだったかな」

「ッ！　そんな事はない！！　ワシは自分の正義の為なら……あいつと夢見た正義の為なら、女子寮に入る事くらい訳無い！！！」

事情を知らない者から聞いたら、どんな正義だ！　とツッコミが来る発言をしながら、ズンッズンッと女子寮へ入って行った。

「ぷっくく……」

『意地が悪いですよ。　葉生』

良いじゃないか、これくらい。

それに、この程度で尻込みするんだったら、本気で協力するのを止めるつもりだったし……。

「お～い！　早く来んか！！」

おっと、いけないいけない。

レジアスに急かされるように、オレはレジアスの後を追った。

――コンコン…

「はい、どちら様でしょう」

ドアをノックすると、聞こえてきたのは優しくも懐かしい声。

「麻倉葉生だ。　ちょっと…」

「ええっ！！　は、葉生！？」

「ちょ、ジャンヌ！　葉生くんってホント！？」

「私が出て来るわ！」

「「抜け駆け禁止よ！　ミイネ！！」」

ジャンヌが驚いたあとに、部屋の中から潤とミイネの声が聞こえ、段々と慌ただしくなっていった。

「あ～……元気な事で」

『此処数年で、さらに争奪戦が激化したのでは？』

「とりあえず、後ろから刺されるなよ？」

アルトリアとレジアスの言葉が耳に痛い。
好いてもらってるのは嬉しい、嬉しいけどオレとしては良い人を見つけて欲しいよ。
シャーマンとして優秀な種を残す使命とか捨てて、さらに言えば落ち着きがないオレを見限って……。

「プーアル茶です」

「お構いなく…」

あのドタバタが収まったあと、オレ達は部屋に上がらせてもらい、レジアスをジャンヌ達に紹介した。

まぁ、その時にアルトリアの事も一騒動はあったけど、それは今は関係ないので横に置いておく……。

さて此処からが本題、レジアスが掲げる正義。
それを受け止めて、ジャンヌ達が力を貸しても良いと言ってくれるなら良し、もしダメなら諦めるしかない。

「それで何用でしょう」

「急で、貴女方の未来を曲げてしまう話で申し訳ないが、ワシの正義について来て欲しい！！　時空管理局地上本部へ、ミッドチルダに住む人々が安心して暮らせるよう……」

「「「……」」」

沈黙、まぁそう簡単に事が運ぶとは思ってなかったし、この展開は当然だね。

「葉生は……葉生はなんと？」

「ミイネ、ジャンヌと潤もだけど……これはキミ達の意思で決めてくれ。　オレが居るから、皆が居るからじゃなくね。　レジアスの意志に、自分の意思で応えてやってくれ」

「ワシからも、お願いする」

「「「ッ！！」」」

オレの言葉に、賛同するように言うレジアスにジャンヌ達は驚く。
当然だろう。

力を貸してくれと言っておきながら、オレがついて行くと言えばついて来るのに、それに頼らないからだ。
レジアスが望むのは、レジアスの正義に共感する者だけ……。
「わかりました。　それでは一週間……時間をください」
「「私にも……」」
「わかりました。　では、一週間後……玄関の方に居ます」
こうして、最初の勧誘が終わった。
オレとレジアスは、すぐに退室して次の場所へと向かった。

ニューヨークからインド。
スピリット・オブ・ファイアのお陰で、素早く移動する事が出来た。
そして、インドに居るシャーマンは一人。
悟りを開き、人々を救い導くシャーマンを目指す……サティ・サイガン。
闇の書事件の時に、オレを救った西岸サチである。
「サティ」
「葉生！　…っとそちらは？」
「時空管理局地上本部所属のレジアス・ゲイズだ。　本日は貴女を

勧誘しに来ました」

「勧誘……」

サティが呟きながら、レジアスの言葉を返す。

そしてジャンヌ達に言った事を丸々偽り無しに言い、サティもまた考える時間が欲しいと言ってきた。

期限は三日で十分らしい……。

次に来たのは中国だ。

此処に居るのは、オレの友達にしてライバル。

ハオより、五大精霊が二つ……スピリット・オブ・サンダーとスピリット・オブ・レインを授かったシャーマンだ。

ちなみにオレは三つ。

一つはスピリット・オブ・ファイア。

一つはスピリット・オブ・ウィンド。

一つはスピリット・オブ・アース。

といっても、ウィンドとアースは預かってるだけだがな。

まぁそれは置いといて、そんなハオに認められたシャーマンの名前は、道蓮。　潤の弟だ。

そして、蓮の他にも二人居る。

蓮の許婚である、カンナ・ビスマルクとマチルダ・マティスだ。

彼女達は一族の修行に耐え、さらには独自の修行法を編み出してジャンヌ達と同レベルまで行ったのだ。

そこから超・占事略決を教えたりと、さらに強くなった。

もっともそれは数ヶ月の天下で、すぐにサティとマリオンに抜かれたけどね。

「よく来たな。　姉さんから聞いてるから説明は不要だ。　結論から言うと、時間をくれ……明日には決めておく」

どうやら、サティから行ったのは正解だったかな。
ニューヨークから中国へ行ったら、潤の連絡は無駄になってただろう。

「もっとゆっくり決めても構わないんだが……」

「いや、蓮が明日までって言うんだ。　明日までに答えは出るよな？」

「当然だ」

「それを聞いて安心した。　さぁ次で最後だ」

「あ、あぁ……」

さて、問題はマリオンか……。
後に後にと考えてたら、結局は最後になったな。

「レジアス……最初に言っておく」

「なんだ？」

「最後の人物だが、どんなに言葉を並べようとも、本人の意思というのは諦めた方がいい」

「どんな人物なんだ？」

「オレ至上主義。　オレが居れば自分の考えを無視して、オレについて来る」

なんせ離れる時もギリギリまで迷ってたし、今でも声を掛ければついて来るからなぁ。

「……どうすればいい」

「こればっかりは、しょうがないさ」

如何（いか）にレジアスの言葉を聞き、自分で考えろと言っても、理由はオレについて行くになるからな。

『良く言えば純真、悪く言えば陶酔……小さなスピリット・オブ・ファイアですからね。　彼女は……』

言うな、アルトリア。

イタリア。

とある場所にある、ぬいぐるみ店。

――カランカラン♪

「いらっしゃいませ、葉生様」

扉を開けると目の前に、長い金髪をツインテールにして、黒いワンピースを着たマリオンが出迎えてくれた。

「久しぶりだな。　オレの言いたい事は……」

「わかってます。　でも私は……」

「マリオンの事は、わかってるつもりだ。　レジアス……」

「どうしてもダメか？」

「無理だ」

「わかった……」

「すまないな……」

レジアスに詫びて、オレはマリオンと向き合う。

「……オレと共に来い。　マリー」

「はい！」

ニッコリと、明るい笑顔を見せるマリオン。

まったく、変わらないな……。

▲葉生視点▲

～第一廻～　スカウト（後書き）

キャラクターのプロフィールって要りますか？

～第二廻～　答え

▼葉生視点▼

マリオンが暮らしてる部屋に、一晩泊まった次の日。
目を開けて隣を確認すると、やっぱりというか案の定というか、マリオンが裸で寝ていた。

「……」

「ん～……はおさまぁ」

起き上がろうとして体を起こすと、マリオンが腕に絡みついて動けない。
仕方なしに、横に置いていた菓子の蓋（当然、缶の）を手に取り……

――ガンガンガンガンッ！！

マリオンの頭に、容赦無く叩き付けた。

「～～～～～ッ！？　痛い……」

「目の毒だ、パジャマくらい着ろ」

「はい」

こうやって毎度毎度注意して、ちゃんと返事するがマリオンは一

向に、パジャマを着てくれない。
ちなみにコレは旅に出て、一ヶ月頃から始まった事だ。
久しぶりに再会して直ってると思ったが、どうやらオレの考えが甘かったらしい。

『元々、彼女を小さいスピリット・オブ・ファイアと評したのは、葉生ですよ？』

ああ、オレが甘かったよ！　甘いよ！　オレは！！　だからそんな目で見るな、アルトリア！！

さて読者諸君、此処でスピリット・オブ・ファイアが嫉妬しないの～とか思うかもしれんが、スピリット・オブ・ファイアが嫉妬するのは、他の霊とオレが親密になった時だけで、生きた人間同士が親密になろうが嫉妬はしない。　たまにするが……。

と朝はバタついたが、あれ以降何事も無く、中国へと旅立った。

「よう、もう決まったのか？」

「ああ……」

「久しぶりね。　葉生」

「マリーちゃんも久しぶり～♪」

「久しぶり、カンナ、マチルダ」

「久しぶり……」

蓮を挟むように居るカンナとマチルダに挨拶をして、三人の答えを待つ。

「俺達は入る事にした。　俺達は互いが抑止力だからな、どちらかが傍に居ないとダメだろ」

「ああ、すまないな」

「ありがとう！」

「それで次は何処へ？」

「インドだけど……まだ時間があるから、蓮の所で一泊する予定だけど？」

「構わんぞ」

いやぁ、重ね重ね……ありがたい。

にしても、昔と比べて落ち着いたなぁ……蓮の奴。

これもハオのお陰か？

《呼んだ？》

呼んでないけど、聞きたい事がある。

《なんだい？》

オレと蓮って、どっちが強いんだ？

《難しい質問だね。　巫力では蓮、霊力ではキミと言った所かな》

フムフム、なるほど……オレの方が若干弱いって事か。

《大正解♪》

わかった、ありがとう。

やっぱり五大神二体は、スピリット・オブ・ファイアを以ってしても、厳しいらしい。

でも、大陰陽師の称号は伊達じゃない。

いつかは決着を着けないとね。

「親父、今日は葉生と他二名が泊まる事に……」

――ガヤガヤ

ん？　なんか騒がしくなった？

蓮が開けた扉を見てみると、そこには数百体のキョンシーと巨人が居た。

そして壁には「義息子、歓迎」の文字があった。

――キィイ……パタンッ

あ、扉が閉まった。

「すぐにインドに向かうぞ」

「え？　いや、でも……」

「行・く・ぞ！！」

「はい……」

というわけで、急遽インドへ向かうことになった。

「あれ？　葉生に蓮、カンナ、マチルダ、マリー、レジアスさん」

インドに着いて、まず向かったのがサティが住んでる家。

本当は、明日の方が良いんだけどね。

「親父がウザかったから、すぐに来た」

「すまんな、サティ」

「いえ、大丈夫ですよ」

サティの許可が出て、オレ達は家の中へ入った。

そのあとレジアスに声を掛けて、シャーマンの修行を課してみた。

しばらく見ていてわかったが、やはりレジアスにはシャーマンの才能があるらしく、どんどんその才を開花させて行った。

「……レジアス」

「ぬ、なんだ？　蓮」

「お前、シャーマンキングの修行をしないか？」

「蓮？」

今まで黙って見ていた蓮が、レジアスにとんでもない事を言い出してきた。

シャーマンキングの修行。　それは、オレと蓮が受けたモノだ。

確かにソレを受ければ、レジアスの力は絶対的なモノとなるが、リスクが高すぎる。

「どうする？」

「それを受けれる程の力が、ワシにあるのか？」

「シャーマンの強さは、強靭な精神力だ。　貴様の正義が本物なら、可能だろう（俺は葉生のような霊視は出来んからな。　だから俺は俺のやり方で、貴様の正義を見極める）」

蓮の心の声が聞こえて来る。

そういった意図があるなら、オレからは何も言えない。

「そう言われては引けんな。　受けよう！」

「良いのか？　ああ言ってはなんだが、アレは軽く死ねるぞ」

「構わん！」

「そうか……ならば、逝けぃ！！」

——ドォォオオンッ！！

蓮はレジアスの魂を剥ぎ取り、すぐさまグレート・スピリッツへと送った。

あとはレジアス次第。

「さて、どうなるか楽しみだ」

「レンはどれくらいの期間、ハオの所に居たんだ？」

「三ヶ月だ。　消滅しかかったのは、二回だったかな」

「マゾヒスト」

「黙れ、リア充」

——ブチッ

「許婚が居るツンデレに、言われたくないな」

「貴様は五人だがな！」

「「……」」

沈黙が部屋を支配する。

そして……

――ガキィィイインンッ！！

「「やるかぁぁあああ！？」」

オレはスピリット・オブ・ファイアの腕だけオーバーソウル化し、蓮はスピリット・オブ・サンダーの腕だけオーバーソウル化してぶつかり合い。　オレ達も組み合った。

――ガスッゴスッ！

「「グハッ！？」」

「地球（ここ）で、喧嘩しないように」

頭に強烈な痛みが走った。

翌日。

朝食を取ったあと、サティに呼ばれた。

「私もついて行く事を決めました」

「ありがとう。　これからよろしく」

「はい」

これであとはジャンヌ達だけど、全くといっていいほど不安はな

い。
レジアスは不安で、一杯だったらしいけど……。
「ところで、スピリット・オブ・アースはどちらに？」
『さっき天に昇って行ったのを見たよ』
『私もです』
「担い手の所へ行ったよ」
「では……あの人が？」
「まだわからないけどね。　あ、そうだ……あと三日くらい居座るけど良い？」
「ええ、どうぞ」
「ありがとう」
さて、残り三日。
ハオからの報告で、レジアスは頑張ってるらしいけど、大丈夫かねぇ。

サティの所に泊まって、三日が経った。
レジアスは、まだ戻らない。

「どうしようか？」

「普通に連れていけば良いだろ？」

「いや、レジアスが起きてないと意味がないからなぁ」

「……やはり見極めるのは、見送ってた方がよかったか」

確かに、空気読めなさすぎの発言だったのは認めるよ。
アレは最低でも、一ヶ月は掛かるし……。
でも、止めなかったオレも悪いっちゃあ悪いんだけどね。

《やぁ、待たせたね》

「「ッ！？　ハオ（シャーマンキング）！！」」

《今からレジアスを帰すよ》

ハオから告げられた言葉の意味がわからずに、オレ達の思考が停止する。
三日だぞ？　三日！！　いくらなんでも早過ぎるだろ！！
《急ピッチでやった！　途中から泣いてたけど……》

「「ああ、わかる。　オレ（俺）も覚えがある」」

レジアス……強く生きれ！！

「それじゃあ、レジアスも戻ってきた所で行くとしようか」

「「…「おー」…」」

「生きてる。　こんなにも生きる事が、嬉しく感じるのは初めてだ。
母さん、産んでくれてありがとうっ！！」

うん、一人だけなんか違うけど、今はソッとしておこう。
誰だって母親に感謝する時がある。
レジアスにとって、ソレが今日だったんだ。

というわけで、ニューヨーク。
ところで、みんなは知ってるかな？　ニューヨークって、漢字で書くと「紐育」こう書くんだ。
覚えておくと、なんか良いことでもあるんじゃない？

「時にレジアスの持霊って何？」

「うむ、大地だ」

「大地？」

スピリット・オブ・アースじゃないのか？

「本来の名前は、スピリット・オブ・アースだが……長いから大地と名付けた」

「安直過ぎじゃないか？」

「う、うるさい！」

だいたいミッドって、欧風の名前だろ？　それだったらアースだけでも……

『『『『……』』』』

「ん、なんだ？　スピリット・オブ・ファイア、スピリット・オブ・ウィンド」

「どうした？　スピリット・オブ・サンダー、スピリット・オブ・レイン」

『『『『……』』』』

「「名前が欲しい？」」

なんと言うことか……。

まさか、スピリット・オブ・ファイア達が名前を欲しがるなんて……。

いや、この場合は愛称か……。

しかし、どうする？　完全に予想外だ。

パッとなんて思いつかないぞ。

「スピリット・オブ・サンダーは雷公（らいこ）、スピリット・オブ・レインは霊亀（れいき）だ」

なんか蓮は、すんなりと言ってる。

ヤバい、オレも考えないと！！　それにしても雷公は良いとして、何故霊亀？　玄武が水を司るからか？　亀繋がり？　でも四神の司る力って、ほとんどバラバラだよなぁ。

青龍が司ってる時もあるし、う～む…謎だ。

「さっさと決めた方がいいぞ。　スピリット・オブ・ファイアが嫉妬する」

『……』

そうだった……。

ヤバい、考えろ！　オレ！！　火、炎、太陽……この三つを司る霊的名前。

カグツチは、没だな。

カグツチは、スピリット・オブ・ファイア自身を指す。

というか、五大神として名を連ねた今では、カグツチなんて下っ端辺りじゃないか？

「……アマ」

――ボゥッ！

アマテラスですら納得いかない様子……。

マジで考えねば、死ぬ！！

「はぁ…（スピリット・オブ・ファイアだけの名前を決めれば良い

んだ。　既存の火霊、火の神の名前を決めた瞬間、終わるぞ）」

「……その考えはなかった」

ならば、真剣に考えてやらないと失礼だな。

スピリット・オブ・ファイアを見て、連想する名前。

火琳（かりん）、火煉（かれん）、炎羅（えんら）、炎浬（えんり）。

これでは、火に囚われすぎか。

オレの名前を一文字加えるとどうなる？

「炎生（えんり）……スピリット・オブ・ファイアの炎に、オレの葉生という名前の生をくっつけて炎生と言うのはどうだろう？」

『……』

スピリット・オブ・ファイアから、嬉しいという感情が流れ込んで来る。

うん、気に入ってくれたみたいで何よりだ。

ただし、心の中くらいではスピリット・オブ・ファイアで良いよな？　真名は大事なんだし……。

「あとはスピリット・オブ・ウィンドか……」

どうせならスピリット・オブ・ウィンドにも、オレの名前を加えたい。

葉……は、ば、ぱ、よう。

風……かぜ、かざ、ふ、ふう。

そしてスピリット・オブ・ウィンドの性別は女。

風（ふ）＋葉（よう）＝風葉（ふよう）

「風葉でどうだ！」

『……』

うむうむ、御満悦の様子。

というか、読む人から見て五大神の感情ってわかるのか？　三点リーダーだろ？

《その為に、キミが言ってるんだから良いだろ？》

まぁな……。

さて考え事をしていたら、ジャンヌ達が居るではないか。

という事は……

「ああ覆面魔導師部隊が完成したんだ！！」

レジアスの喜びに満ちた声が、周囲に響く。

周りの視線が痛いが、今は祝福しておこう。

「さぁて、此処から本腰を入れるぞ！　会議だ、レジアス！！」

「わかってる！！」

▲葉生視点▲

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4471z/

特務部隊はシャーマン！？

2011年12月18日06時46分発行